

「W杯10回取材の〆眼」

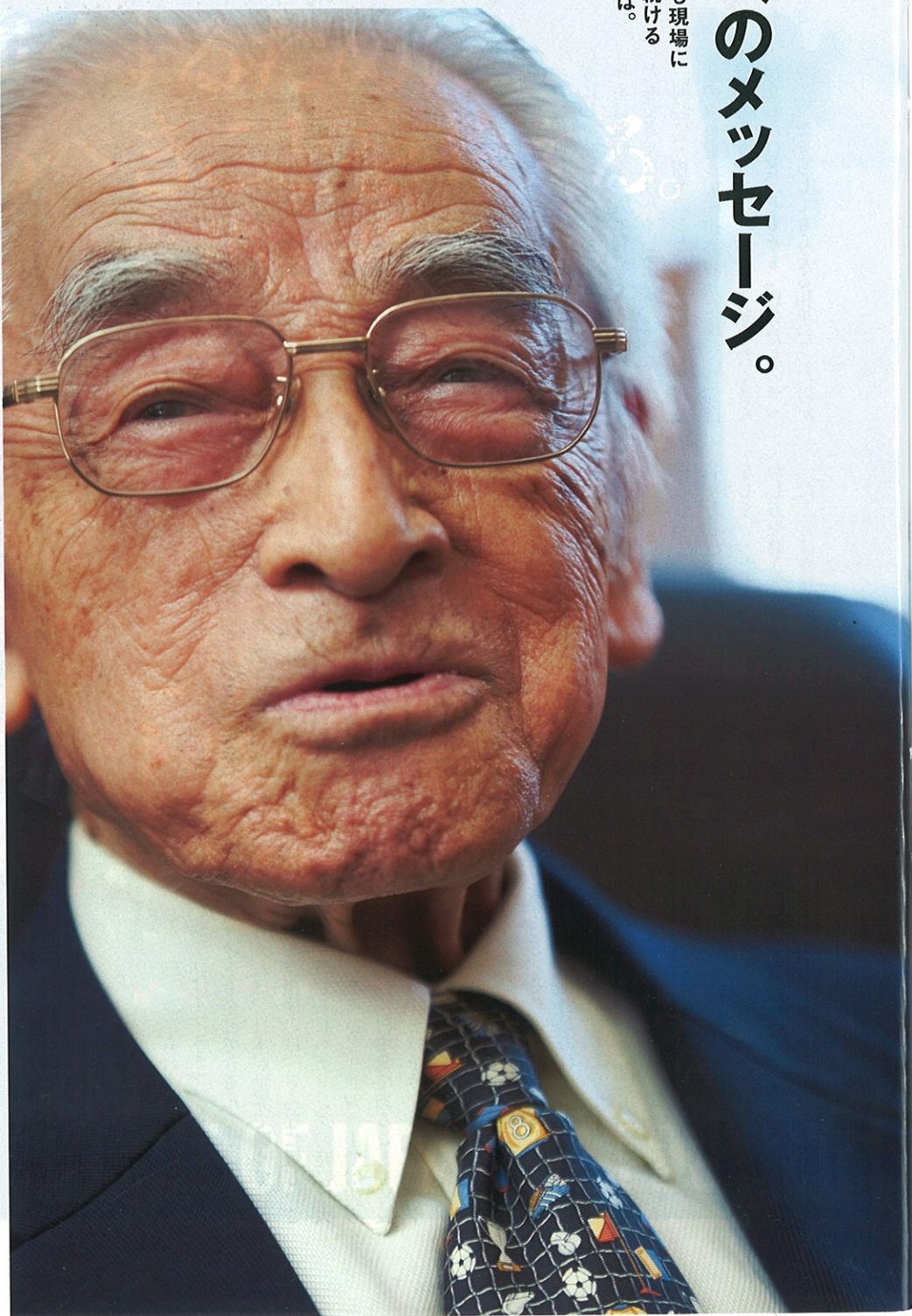
日本サッカーへのメッセージ。

90歳の現役サッカーライターとして、今日も現場に足を運ぶ。フットボールの最前線を観察し続けるその〆眼に浮かぶ、日本サッカーの未来とは。

白澤正 写真
photographs by Tadashi Shirasawa
text by Masayuki Tanabe

僕は大阪の産経新聞の大阪支社で、それこそ文化部に福田定一（後の司馬遼太郎）がおるような頃から、サッカーを伝えてきた。その結果、W杯も10回取材することになったわけだけど、心がけてきたのは、一レポーターとして事実をひたすら正確に伝えることでした。もちろんサッカーの伝え方にも二通りあって、「なっていないやないか」と怒りながら書く人もおるけれど、僕はいいところを見つけて、面白がりながら書くようにしてきた。そやから60年間も続けてこれたんじゃないかと思えます。

この間、日本のサッカーも大きく様変わりしましたが、全体的に見るなら順序を踏んできちんときているんじゃないかと。大きな破綻もなかったし、W杯の予選でも勝てるようになった。たしかにブラジル大会やアジアカップがああいう結果になって、伸び悩んでいるという人もおるけれど、そんなことはないでしょう。選手は皆、うまくなつたし実力も上がってきた。それを結果として、試合に勝つ力がないだけなんです。昔、僕らが考えていたのは、日本全国併せて、マンチエスター・ユナイテッドのようなクラブに追いつけるかどうかやうた。でも選手の数や規模からしたら、今はとくに追い越している。だから本当なら、ユナイテッドより強くなつていてもいい。実



際の話、ブラジル大会ではベストコンディションで試合をしていなかったし、釜本邦茂（クラス）のCFが一人か二人おつたら日本は勝つていたと思えます。

では、なんでストライカーが出てこないのか。評論家の人たちは国民性云々と得意げに言うけれど、そんなことはあらへん。サッカー選手にとって一番大事なところ、練習量が単純に足らなだけなんです。

CFは10回なら10回、後ろから来たボールをびたつと止めて、得意な角度に持つて

皆がやってきたことです。

これから日本サッカーはどうなるのか。俺がやらなあかんと思える選手が出てこない、しんどくなるでしょうね。ただし真司や圭佑にしても、あのままで終わるわけがない。まだまだうまくなります。次の世代で可能性のある選手が、追い抜いてくることもあるでしょう。僕は先日（宇佐美 貴史に、「今年は君の年やぞ」と声をかけたんです。

Symposium

8

Hiroshi Kagawa
賀川浩



Getty Images

（写真右上より時計回りに）1979年、ワールドユースで来日した18歳のディエゴ・マラドーナと／同年、マリオ・ケンペスにインタビュー／'80年、ワシントン・ディプロマツツの一員として来日したヨハン・クライフに取材／'83年にケビン・キーガンと／'88年頃、カール・ハインツ・ルンメニゲに平安神宮の庭園で取材／今年、日本人として初めて、サッカー界への特別な功績を讃えるFIFA会長賞を受賞した



「Jリーグの23年も前身の土台あつてこそ」

もちろん世界には、デイエゴ・マラドーナやクリスティアーノ・ロナウドのような選手もいる。彼らのような選手が少ないから、周りの選手が協調動作をするというのが日本のサッカーだった。

ただし、日本にも可能性を感じさせる選手は出てきている。一番いい例は2010年の圭佑でしょう。彼のところにパスがいったら、すぐには前に行けないにしても、自分たちのボールにしておけた。

でも、それで安心してると今度は攻撃ができなくなる。選手が一口气うまくいったわけやないから、相手からしてみたら、日本はパスを回しているだけで、あんまり怖くないわとなってくるんです。

今の日本は、まさにこういう過渡期にあるし、そこを抜け出すのが次のステップになる。でも僕はあまり悲観してません。ちよつと足踏みするかもしれないけど、この手の問題が出てきていること自体、前よりレベルが上がってきた証拠やし、どこかでシユツという方向に行ければ道が拓ける。

一つの参考になるのは、なでしこの戦い方やと思います。女子の場合は男子よりも遙かに体格差が大きい。その分だけ世界との戦い方も知っていますから。

「自分たちのサッカー」の前に、過去の教訓から学ぶべきこと。

それともう一つは、最も大事な自分たちの歴史、自分たちが依って立つものを、しっかり勉強していくことでしょうね。

今、釜本のことを本当に知っている人がどれだけおるか。釜本自身も昔の選手からヒントをもらっているのに、彼のことをき



Hiroshi Kagawa

1924年12月29日、兵庫県生まれ。学生時代に自身も選手として活躍。'52年に産経新聞社に入社。サンケイスポーツ編集局長を務め、'90年、定年退職と共にフリーに。2014年ブラジルW杯を含めこれまで10回のW杯を現地取材。今年1月12日、日本のサッカー発展に長く貢献してきたことを讃えられ、FIFA会長賞を受賞した。

ちゃんと研究しようとする人がおらん。1930年の極東大会でCFを務めた手島志郎さん、'36年のベルリン五輪で最初に点を取った川本泰三さん、戦後の第1回アジア競技大会で銅メダルを取った二宮洋一さん、こういう人たちを見ればわかるように、日本のサッカー界は昔から優れた選手を輩出してきた。デットマール・クラマーという指導者が来る大分前、映像も資料もなかった頃からです。

それができたのは皆で考え、話し合い、練習もしたからなんです。ヨーロッパの連中には周りに見本がいっぱいあるから、参考にしてヒントをもらったらええけど、こっちは荒野を一人で行くわけやから、自分たちで考えなければならぬ。

同時に、相手のことも知らないあかん。去年のブラジルW杯が終わった後には、「自分たちのサッカー」云々という話もたくさん出ましたけど、そもそも「自分たちのサッカー」をやらしてもらえない相手だったのか

どうか。こつちが相手のことを知っている以上に、向こうも自分たちのことを知っているわけ。それは第二次大戦の話と同じなんです。日本が相手の空母艦隊を発見したというでも、自分らも敵に発見されている。だから爆弾を魚雷に積み替えているうちに、上から急降下爆撃隊に襲われてしまふ。戦争でもサッカーでも、そういう教訓は長い歴史の上ですうつとある。

早い話、司馬遼太郎の『坂の上の雲』が昭和の初めに出ていたら、日本人は真珠湾攻撃なんかしていなかった。だけど当時の状況では不可能だったし、戦後だからこそ資料も揃って、ああいう公平な歴史を書くようになったんです。

これはサッカーにも当てはまります。ましてや今は、これだけ情報も芝のグラウンドもあるわけやから、きちんと考えて努力をしていいたら、自分たちなりの技術の活かし方や磨き方も見えてくる。

たとえば身長が190cmもあるソクラテ

小さいジーコはインステップもチョップも、アウトサイドも全部できるんです。

そう考えれば、日本が世界で戦っていくための道を見出すのは、そんなに難しいことやない。たしかにヘディングの時には大きい方が得になるけど、サッカーでは体の小さいことも、中肉中背であることも特長になる。サッカーとはそういうスポーツやし、そこにこそ面白みがある。

Jリーグが始まってから今年で23年になりますけど、それは日本サッカーリーグ時代の27年間の土台があればこそなんです。これからは50年かけてようやく出来上がった形を大事にしながら、地元に着着したフットボールの文化を、また長い時間をかけて育てていくことが課題になる。C・ロナウドやメッシのように、バロンドールにノミネートされる選手が日本から一人でも二人でも出てくるようになれば、ほんまに盛り上がりますよね。(構成 田邊雅之)

[再び世界の頂点を目指して]

“未来の日本代表”を強くするために、今やるべきことを考える。

日本サッカーを取り巻く環境は本当にこのままで良いのか？
今こそ、みんなで“未来”について真剣に考え、具体的な行動を起こす時なのではないか。
そこでまずは様々な立場の4名に、“日本サッカー育成論”について熱く語ってもらった。

二宮寿朗-文
text by Toshio Ninomiya



THINK FOR THE FUTURE OF JAPANESE FOOTBALL

J.LEAGUE PHOTOS